

## 白頭山（長白山）遊山の記

長白山は中国東北部、北朝鮮との国境に位置する長白山脈の最高峰である。

山頂は天池と呼ばれる火山湖を囲むように輪状にいくつもの峰が連なり、北朝鮮側の將軍峰（2720m）と呼ばれるピークを最高峰とする。

朝鮮側では白頭山（Pektousan）と呼ばれ、朝鮮半島の最高峰であり、古来より朝鮮民族の信仰を集めた山であるが、中国側からは長白山（Jyonsaisyan）と呼ばれ、中国東北部の最高峰であり、この地域が中国の朝鮮民族の生活圏にあることからやはり信仰の対象として崇められてきた山である。

日本では、昭和九年末から十年初頭に掛けて、当時の京都帝国大学山岳部が、朝鮮側からこの山を目指し、氷点下48度という酷寒の中、極地法登山の試みを成功させたことで、登山史上特筆される山となり、寧ろ「白頭山」としての名前が定着しているが、私の祖父佐伯宗作がこの登山隊に参加している。

祖父は、当時三十七歳、立山ガイドの中でも実力派としての評価が定着し、この登山の後にヒマラヤの高峰へ夢をはせる京都大学の西堀栄三郎氏や、今西錦治氏等から絶大な信頼を寄せられ、是非にと乞われての参加であった。

大成功裏に終わったこの登山は

しかし、祖父にとって最期の檜舞台となる。

祖父はこの登山から帰国し、僅か四ヶ月の後、昭和十年五月四日、立山地獄谷に劇的な最期を迎えたのだ。

それ故、白頭山は私にとって、いや、我が家系に繋がる皆にとつて非常に思い入れのある山であったが、複雑な国際情勢の中、現在北朝鮮国内からこの峰を目指すことは極めて難しく、祖父の足跡をたどりたいとは思いながらも果たせぬ夢の山であった。



今年の春、北陸電力の山岳部で長白山に登る計画があることを、父の友人であり、私もお付き合い頂いている長老OBの津田さんに聞いた。躊躇わず「津田さん、おらも連れて行ってくれ」と頼み込んだところ、津田さんは「お前なら仕方ない。メンバーに入れてやる。」と頼もしく答えて下さったものである。

北陸電力は地元電力会社であり、我が一族の幾人かや芦峯寺住民が何人も奉職している会社であり、山岳部の皆さんともかなりの方々と面識があつたので、極めて馴染み深い会社であつたため、厚かましく私の従弟と、友人の政二さんの参加までお願いすることとなり、けれど快く受入れて頂いた。

9月11日午後1時半「北陸電力長白山登山隊」は私と、従弟の克志、友人の政二さんを付録に富山空港を発った。

小柄な政二さんはともかく、体重80kgをやや越える私と克志にとつて、航空機のエンジン席など出されると折り畳みテーブルがじゃまで益々動けない・・・。

大連に到着し、やっと拷問席？から解放されたと喜ぶ間も在ればこそ、大連から又飛行機を乗り継ぎ、吉林を経、2時間あまり、総勢27名の一行が当夜の目的地延吉に降り立ったのはすでに夜である。

私たちの予想を裏切り、朝鮮民族自治区である延吉は中国東北部の大会。飲食街などまさに不夜城のようで、案内された大きなレストランは団体客専用の朝鮮料理店。

若い接客要員達はきびきびと甲斐甲斐しく、朝鮮料理が苦手な下戸の私も何とはなく楽しい雰囲気にもまれて、酒豪居並ぶ北電山岳部諸兄のペースに飲まれていった。酒では後に落ちない我が従弟に至っては鱈腹飲み、食い、体重を更に増していた。ホテルに到着したのは既に深夜、持参のモバイルもインターネットに接続出来たらしいのだが、流石に疲れてそのまま白河夜船となってしまった。

9月12日、時差1時間のせいか、早朝6時前に目覚めてしまう。

昨夜熟睡したので、目覚めは爽快で、朝食までの時間をフラリと散策に出た。

昨夜は闇に包まれよく見えなかった外の景色が清々しい大気の中にキラキラと輝いて見える。ホテルの前の大通りに沿って、歩道は柳の並木道。ふらふら徒歩を進める中に大河を渡る橋詰めへと出た。そこにはちよつとした広場があり、太極拳を楽しむ人達や、川に釣り糸を垂れる人達が居て、のどかな朝の異国情緒溢れる一コマとして、旅人の私の網膜に写った。

延吉からバスに揺られる事6時間、長白山登山口に到着する。

流石にここまで来ると山の気が溢れ、延々と続いたトウモロコシ畑の大地とは一線を画す山岳地帯特有ののにおいを感じた。

予定ではここで投宿し、翌日の登山と言うことであつたが、年に幾度もない好天気で、山頂から天池が素晴らしく望めるとの情報が入り、全員この機会を逃さず登頂したいとの気運が高まる。リーダーの水上さん知田さんがガイドと相談、夕刻3時を回っていたが、登山開始を決定した。

OBの皆さんの意気軒昂な事に驚くとともに、好天下での天池との対面が出来ることに私達も嬉しくなる。

頂上直下まではジープで九十九折りの舗装路を、極めてスリリングな速度で登る。

九十九折れの道には立山アルペンルートで十分慣れているはずなのに、この道は恐ろしい。道幅が狭いし、カーブの角度が異常に強い上に、運転手の運転が乱暴で、何か投げやりな運転のようにさえ思えてくる。おまけに道ばたの草原には転倒大破した車の残骸が野ざらしになっている・・・。

「酷い運転だなあー。もっと安全運転するようにドライバーに言ってくださいよ。」と、堪らずガイドに言う。「大丈夫です。運転手は慣れているから。」と、自分も一生懸命手摺りにしがみつきながらガイドのYさん。余り大丈夫そうではなかったが、車はどうやら天文峰直下の広場についた。

天文峰は、天池を囲む外輪山の一つのピークで、今回の私たちの目的の峰だ。ジープを降り見上げれば直ぐそこが山頂である。天池との対面は直ぐそこ。はやる気持ちを抑えながら、最期の一登りを息切れしながら登った。

と、突然視界が広がり、足下に天池が満々たる水を青々とたたえて、広がっている。

大きな山頂湖の外周を峰々が取り囲む、かつて見たことのない景観にしばし圧倒された。

「向かいに聳えるあのピークが最高峰の將軍峰です。」と、ガイドのYさんが指さす彼方は北朝鮮領で、今回の登山では登ることはかなわないが、祖父の足跡をとどめたその峰がくつきりと見える。

私と従弟の克志は感動していた。互いに写真を撮り合い、共に写真に収まり、その感動をカメラに取り込



むことに没頭する。

祖父故に憧れ続けた白頭山天池との対面はあっけないほどスムーズであった。

かつて氷点下48度のシベリア寒気団の下を登り、超人的な力を発揮し、京都大学白頭山遠征隊の登頂に大きく貢献したと言われる祖父への思いが、顔さえ見たこともない祖父であるのに強くこみ上げてくる。

なにやら向かいの將軍峰山頂に祖父が立つてこちらを笑いながら見ているような気がして、「俺も五十歳、克志も四十四歳、貴方の生きた年を、もうとうに越えてしまった孫が二人、今ようやく貴方の足跡をたどってここまで来ました。」と私は將軍峰に向かい語りかけていた。

そろそろと夕暮れの気配が濃くなってきた山頂を今一度網膜に焼き付ける。

後は一息に頂上からかけ降りた。



9月13日、祖父の足跡に迫り、天池を目の当たりにした興奮でか、早朝に目覚めてしまう。

宿泊の宿はかなり日本の温泉宿に近い雰囲気で大浴場まであったが、元来が風呂嫌いな私にとつて温泉宿は興味の対象外、むしろ食い気に走りたいのだが、漬け物、味噌と言った食物が大の苦手な私にはこの朝鮮自治区の料理も正直なところ辟易してしまっていたのでコーヒーがやたらと飲みたかったがここでは満足なコーヒーなど望むべくもない。

日本語も勿論、英語も殆ど通じない温泉宿である。しかし私は早朝に熱湯を部屋へ運ばせ手持ちのドリッブコーヒーを立て飲むと目論んだ。

フロントに電話し、とりあえず英語で「ホットウォータープリーズ」とやったら意外にもすんなり通じて、ついでに「ティーカップアンドシュガーオールソープリーズ」と付け足すとこれもあっけなく通じた。そして数分後全てが要求通りに我が部屋に運ばれ、私は満足すべき早朝の日本製ドリッブコーヒーを喫することが出来た。物事はあきらめる前にやはり試してみる価値はある、と、この時は思ったが以後このようにスムーズにリクエストが通った事はなかった。

予定が早回った関係で、この日はボツカリと空いた。

比較的ゆつくりと長白山周辺の散策に終始した。谷底森林と呼ばれる奇妙な地形の森林を巡り、長白瀑布、小天池などを巡った。手つかずの自然が残されたエリアであり、中高齢者の散策には打つつけの所だが、所謂安全施設などは皆無に近いので、足を踏み外したりしたら落命するような危険個所も至る所にある。まあ、それ故手つかずの自然なのだが。

夕刻投宿したホテルでは日本から取り寄せたおいしいコーヒーが飲み、一杯600円と、この地にあつては極めて高価なものにもかかわらず、多くの皆さんがこれを堪能していた。朝、昼、晩と続く朝鮮風中華に全員がそろそろ飽きてきたようだ。

今朝の自前のドリッブコーヒーの方が美味しいと思われた、程度のコーヒー・・・。



9月14日、長白山を後に吉林へと向かう。山並みを抜けるとトウモロコシ畑が延々と続く。バスの窓から望める景色は13億の国民の食料の何割かを満たすべくただただ広大



に広がるトウモロコシの畑ばかり。ついには気が遠くなり寝込んでしまうバスの旅は8時間におよび、夕刻吉林へと付いた。

吉林では東北電力会社の幹部職員ご夫妻の出迎え歓迎を受け、満族伝統料理の晚餐を喫する。皆さん、酒には飽きないが、中華料理にはかなり飽きてきたようで、箸が進まない。食後ホテルへと向かう。このホテルではコンピュータのインターネット接続が可能で、4日振りにメールのチェックが出来た。接続はダイヤルアップ式だが、ホテル専用のアカウントを貸してくれ、料金も極めて安かった。

9月15日、東北電力会社の計らいで、豊満ダムの見学。私たち付録組も同行を許され、豊満ダムの見学に参加する。

広大な大陸国のダムとあって、豊満ダムの規模は大きい。歓迎セレモニーなどの後、遊覧船でダム湖の見学をし、大盤振る舞いの昼食をごちそうになる。

豊満ダムとれる魚介類を主とした豪快な中国料理には圧倒された。皇帝の魚と言われる白魚(はくぎょ)の揚げ物は流石に絶品で、非常に美味しかった。

午後お世話になった東北電力会社の皆さんの見送りを受け、吉林を発ち、瀋陽に向かう。瀋陽は元、奉天と呼ばれた大都會で、夜の到着となる。



9月16日、昨日の豊満ダム訪問を最期に公式行事は終わり、今日からは観光の予定で、瀋陽故宮などを見学の後、列車により大連へと向かう。

列車は、旧満州鉄道の路線がそのまま、私たち外国人は「軟席」と言うグリーン車への乗車しか認められない。軌道幅が広いいわゆる”広軌”なので、乗り心地も良く、相変わらず窓外にはトウモロコシの畑がひたすら続く4時間余の列車の旅だ。物売りがひっきりなしに車内を巡回し、果物や肉の薫製などの食べ物元より、本に地図、ついには玩具の実演販売までが席へ巡り来て、言葉など通じようが通じまいが身振り手振りでの遣り取りが面白いことこの上ない。

夕刻、5日間振りの大連に戻り、出迎いのバスでレストランへと夕食に向かう。大連の夜は色鮮やかなネオンに彩られ、中国の近代化が加速度的に進んでいることを痛感した。ホテルに到着したのは例によって深夜であった。

9月17日、大連ならばホテルでインターネット接続が可能だろうとの期待は、私たちの投宿したホテルでは見事に裏切られた。ホテルのキャッシャーで両替を頼むが、英語が通じない。ようやく英語の出来るホテルスタッフを捕まえ再挑戦すると、今度は手持ちの現金が無くて出来ないとのこと・・・見かけはかなり立派なホテルなのに、やはり内容はお粗末である。

開放政策を取り、自由化が急速に進む中国では外貨獲得の有効な手段の一つとして外国人観光客の受け入れに熱心である。広大な国土を抱えるお国柄のこととて、観光資源には事欠かないのだろし、観光客受け入れ施設も可成り充実してきている。

しかし、その施設を効率よく運営するシステム、つまりサービス面においては全く期待はずれである。ホテル、売店、レストラン等々いわゆる接客業での基本的ノウハウが、著しく決滅している。いくら施設面が華々しく近代化しようとも、それを運営するソフト面に於いては発展途上なのだ。

203高地、旅順港、水師営等の、戦跡を巡り、大連の市内を観光する。

夕刻食事に向かうが、海鮮料理を堪能した後、最期の晩とて大連一番の高台にあるテレビ塔内のスナックを貸しきりでの大宴会と続きホテルに戻ったのはやはり深夜となった。



9月18日、早朝にホテルを発って一路大連空港へ向かう。搭乗手続きやら出国手続きを経て帰国便に搭乗、狭いシートでエコノミー症候群の心配をする間もなく、2時間10分で富山空港へ帰国した。

全員が元気で事故もなく各々の思い出を胸に、和やかに挨拶を交わし解散となる。

北陸電力山岳部の長白山登山は斯くして終わった。

部外者である私たちを同行させてくださり、旧知の山仲間同様に接し、お世話下さった北陸電力山岳部〇田諸兄、現役の皆様様に心より感謝申し上げ、参加の記の締めくくりとしたい。

平成14年10月2日